

土木界・土木学会は、 これまで何をしてきたか これから何をすべきか

2014年11月24日に、土木学会は創立100周年を迎える。我が国をとりまく環境や、土木界・土木学会に求められる社会的な要請が大きく変化する中、これからの土木が何をビジョンとし、何をすべきかを考え、これからの行動に繋げていく機会とするために、2012年9月の全国大会において百周年記念討論会が開催された。『土木界・土木学会は、これまで何をしてきたか、これから何をすべきか』というテーマを掲げ、市民、マスコミと土木界の代表者が土木の来し方を振り返り、行く末を語り合った。

第一部では「土木学会・土木技術者のこれまでを振り返る」をテーマに、5名の土木学会員より基調報告が行われた。



百周年記念討論会

こととして、東日本大震災を機に安全安心な国土形成の意識が高まる中、避難する「被災」文化を浸透させるためには、被災の仕組みや整備の在り方を考え、市民に明快な説明を繰り返すことが肝要とご指摘を頂いた。

土木学会顧問・前会長 山本卓朗氏からは、土木の必要性の認識に対し、社会変化の過程で市民と土木界にズレが生じた事を問題認識し、その原因を知り、土木の原点を再認識すること、その上で未来プロジェクトを構想し、学会活動と共に社会へ公開する、実行組織としての学会たるべきと述べられた。

京都大学教授 藤井聡氏からは、土木とは生活環境を整えて人を助けるものであり、諸処の状況に応じた広範な学問が必要である。また、国全体が活性化するためには、国土計画の根幹を

土木学会副会長 林良嗣氏から「これまでの土木学会活動のレビュー—社会経済の変化に応じたインフラ・土木学会の変遷と展望」を、企画委員会からは企画委員会幹事長 高野 昇氏が「土木学会への期待ヒアリング等概要報告」、企画委員会副幹事長 宮田喜壽氏が「土木技術者実態調査結果概要報告」、支部からは東北支部幹事長 奥村誠氏、関西支部幹事長 建山和由氏が支部活動の報告を行った。

第二部では6名のパネリストを迎え、それぞれの話題提供を基に「土木界・土木学会は、これまで何をしてきたか、これから何をすべきか」について討論が展開された。

中京大学教授・元名古屋大学副総長 奥野信弘氏からは、土木界の社会・経済に関する幅広い関心、高度成長への貢献、公共投資批判をどう受けとめるか、先進国にふさわしい安定感ある社会の構築についてと、様々な視点で述べられ、これからは多様な主体と連携し、支持社会を拡げ、なおかつ社会資本整備の仕方を明確にすることが大事とご指摘を頂いた。

(株) 宣伝会議取締役編集室長 田中里沙氏からは、これまでの土木の誠実・着実な歩みや総合技術力、人間力等の背景や物語性が社会へ伝達不十分と感じられることから、それらの共感や理解を得るための広報活動を行うべきで、効果的な情報発信方法やコミュニケーションの視点についてアドバイスを頂いた。

NHK 解説主幹 山崎登氏からは、土木技術者に求められる築くことが必要と説かれた。市民へ真の土木を理解してもらうために、土木界の情報発信組織の工夫についてもご提案された。

国土交通省中部地方整備局長 足立敏之氏からは、脆弱な国土を克服しながら日本は繁栄、成長してきた。中部地方はモノづくりの地で、流通のための陸海空、高速道路の発達は土木が支えてきたが、50年前のインフラに頼り、守られている現状。新しい科学技術を統合し、未来の絵を描くことが重要であると述べられた。

最後に会場からは、学会へ発信力を期待する声や、将来を担う若手技術者に夢が持てる未来像を与えたいなどの声が寄せられ、盛り上がりの中での閉幕時間となった。

(百周年戦略会議幹事 長井宣子)